

（本マル公言）
動労部が

「動労旭川地本の驚くべき反階級的」を弾劾する

組合員のみなさん。全国の国鉄労働者のみなさん。政府・自民党、監理委員会、国鉄当局は、一九八七年の国鉄「分割・民営化」までに、実に十二万人に及ぶ首切りを狙った国鉄労働運動解体攻撃をかけてきています。
ところが、国鉄労働運動内部で労働組合の仮面をつけて、こうした攻撃に手を貸す悪質な集団が登場していることに警鐘を乱打しなければなりません。
八月に「動労旭川地本」が国労組合員を対象にまいた「ビラ」のもつ反階級性について、全国の労働者に暴露し、ファシスト集団＝動労「本部」革マル追放・一掃の闘いを呼びかけるものです。

国労が「労資協調関係」を壊したと悲鳴

「動労旭川地本」発行の「この現実について討論を深めよう」なるビラが、どれ程反動的代物なのか紹介していきます。（※裏面の「ビラ」参照）
「ビラ」は、五項目からなっており第一の「国鉄本社職場規律で旭川局は最低と判断」では、七月に本社職員局の「職場管理監査」が駅、保線区等国労職場を対象に実施された結果、「惨たんたる状況」などと、当局と同じ論調で国労の職場抵抗闘争を嫌悪し、腹を立てています。

第三の「本社による国労職場の点検は何をもたらしただか」では、「監査」当日、国労内一部青年部の役員、活動家が「車の内側にステッカーを貼り職場内に駐車」したり、「作業服に分割・民営化反対と書いて仕事をした」ことが、「旭川局が総力をあげて攻撃をかけるを得ないところまで追いこまれてしまった」のであり「重大な攻撃を引き出した」として職場抵抗闘争を否定し「闘うからやられる＝闘うべきでない」との反動的主張をまたもや展開しているのです。

第二の「旭川局は職場規律で非常事態体制か」では「職場規律に細心の注意をはらってきた旭川局にとって、職場管理監査で露見した現実早急な解決を本社から指摘され本格的対策がせまられている」「当局としては分割・民営化させない努力をしていることを（国労は）どう分析し、どう見ているのか」といひなしています。

第四の「勇気ある国労組合員の努力を期待する」では、「労働者一般を搾取・収奪されるものと論じ、それを現実にあてはめ労働者の階級性を主張するのは馬鹿げた論理」であるとし、「資本主義社会であつても労働者はめしを食べて生きていなくてはならない……資本主義社会を肯定し意識の内において否定するのであり、現実において否定するなら労働者は資本主義社会では生きていけない」などと、「冬の時代」論によつて階級闘争そのものを否定してしまっています。

「動労道本」は全国にさがかけて「提言」を発表するなど、「分割・民営化反対」の当局と労資協調でうまくやってきたのに、国労の闘いはこれをぶちこわすものだと思われているのです。
そのうえで「マル生当時のように国鉄当局自らが国鉄労働者に攻撃をかけてきたことと同様に考えているなら大きく判断を誤ってしまう」などと現在の攻撃は当局がやっているのではなく、「政府・財界の国家的意志」によるものといいきり、当局が労働組合の味方であると明確に主張しています。

「当局は首切りを阻止するために三本柱をうち出したのだ…」



「『三本柱』は首切りではない」と主張

「ビラ」の内容は、何ら説明を要しない程、あからさまに革マルの本音を述べています。さらにつづけて見ていくことにします。

「三本柱」といひなした「国鉄当局が打ち出している三本柱は、政府、監理委が生首を切ろうとしている中でその攻撃を阻止するためのものとして出されている」などと決定的な言辞を吐いています。
革マル反動分子は「三本柱は首切りを阻止するためのもの」であり「首切りではない」「だから反対しない」というとんでもないペテンを弄して国鉄労働者を騙そうとしているのです。
動労「本部」革マルのファシストとしての正体は鮮明です。この期に及んで、まだ「動労」に幻想をもち追隨する組合員も同罪といえます。
動労「本部」革マルの追放、一掃を国鉄労働者の力で実現しなければなりません。

当局職制、鉄労マニ生分子も顔向けの「反階級的見解を恥かじげもなくゆめ
きぢらしい、国労に反省を求めろ、反動的ビラ。当局と完全一体の動労革マニの本姓、

この現実について 討論を深めよう

国鉄動力車労働組合旭川地方本部

国鉄本社

「職場規律で旭川局は最低」と判断

去る七月二十四日から二十八日にかけて、本社職員局を中心として旭川局管内に「職場管理監査」がはまりました。具体的には、職員局山村調査役、旅客局藤井調査役、施設局町井調査役、労働課高橋補佐など本社から六名が、幌延駅、留萌保線区、北旭川駅、名寄保線区にそれぞれはいり、第五次職場総点検（五十八年十月一日から五十九年三月三十一日）の結果にもとづき職場規律点検・指導を行いました。伝え聞くところによると、その結果は惨憺たる状況で、「全国的にみて一番遅れている局」であり「抜本的な対策を早急に実施しなければならぬ。」と言われています。具体的に早急な解決が必要と指摘されている事項は、「点呼の厳正」「ワッペン」「氏名フダ」「組合旗」「看板」などであり、根本的には、管理者の指示に反発し反感をもっている事などとされているのです。

旭川局は

職場規律で「非常事態体制」か

職場規律に対して細心の注意をはらって取り組んできた旭川局にとって、本社の「職場管理監査」で露見した職場の現実、早急な解決を本社から指摘されている中で、旭川局の存亡をかけた問題として強権的な機能を最大限に發揮して抜本的対策がせまられているのである。

国労組合員の皆さん！

国鉄当局による第五次総点検や、これに基づいた本社の「職場管理監査」実施をどのように考えているのですか。政府が国鉄再建法という、法に基づき設置した国鉄再建監理委員会の動向や、国鉄悪者論など世論の批判、国鉄「分割・民営化」が国民世論の大勢をしめている状況の中で、国鉄当局としては「分割・民営化」させないための努力をしていることについて、国鉄当局をどのように分析し、どのように見ているのですか。

マル生当時のように、国鉄当局自らが国鉄労働者に攻撃をかけてきたことと同様に考えているなら、大きく判断を誤ってしまうのではな
いか。現在の国鉄労働組合は、政府・財界の国家的意志にもとづく
攻撃であり、われわれのたたかいは政府とのたたかいなのである。

本社による国労職場の点検は

何をもたらしているのか

本社は今回の職場点検の結果、営業・施設をとわず、運転や電気職場規律が全国で一番遅れている局として、総力をあげて攻撃をかけようとしています。本社にとって、日本の北のはずれですべてが地交線という旭川局でもあるがゆえに、局の廃止、駅や機関区、保線区を廃止してでもと考え、具体的な攻撃をかけてくることは明確なのではないでしょうか。

その攻撃を引きだし、あまつさえ旭川局が総力をあげて攻撃をかけるをえなないところまで追いこんでしまったのが、国労内一部青年部の役員・活動家のやっていることではないですか。聞くところによれば、本社が来ることを事前に察知して、車の内側にステッカーを貼り職場内に駐車・したり、作業服に「分割・民営化反対」と書いて仕事をしたそうです。この「いわゆるイヤガラセ」は一体何の意味があるのですか。このことにより重大な攻撃を引き出してしまっていることに対し、何らかの責任をもっているのですか。早いうちに改めないと、その組織的基盤すら失ってしまいます。

勇気ある国労組合員の

努力を期待する

(国労運動を日本労働運動の変革を担いうる組織とするために)

社会の一般的な分析により、資本家と労働者の闘い、国鉄当局と国鉄労働者との闘いと思えば論理。労働者一般を搾取・収奪されるものと論じ、それを現実にあてはめ労働者の階級性を主張するものとして、仕事をすれば搾取される。したがって仕事をしないことを搾取されない、などとするのは、馬鹿げた論理ならざる「論理」なのである。

資本主義社会であっても、労働者はめしを食って生きていかななくてはならないのであり、その中で労働組合は組合員の生活や労働条件を守るためにあるのです。資本主義社会を肯定し意識の内において否定するのであり、現実において否定するならば労働者は資本主義社会では生きていけないのです。

このような馬鹿げた「論理」がまかり通っているとすると大変なことであり、一日も早く改め、国鉄「分割・民営化」攻撃は誰がかけてきているのか、国鉄当局は何をしようとしているのか、攻撃にたち向うために反対運動の状況を分析し、国労として何をすべきか、いまこそ問われているのです。

国鉄当局の余剰員攻撃を

どのように考えるべきか

国労は、余剰員攻撃を「首切りの一里塚」と位置づけているが、これは現象的な分析でしかありません。監理委は、政府は、国鉄の余剰人員をどうしようとしているのか、国鉄当局の余剰員対策は民間の攻撃として比較してどうかなどを分析した時、国鉄当局が打ち出している三本柱は、政府・監理委が「生首を切ろう」としている中で、その攻撃を阻止するためのものとして出されているのではないのでしょうか。そのことが分析できないとしたら、重大な判断のあやまちをおかしてしまおうといわざるをえません。

国労組合員の皆さん！ 組合員としての勇気ある発言や活動によって、一日も早く国労・動労共闘が実現するよう期待します。